

## 研究報告

愛媛県で発生したイシダアワフキによる  
施設栽培イチゴの被害とその防除対策

愛媛県南予地方局	はぎ 萩	わら 原	か 佳	ず 津
愛媛県病害虫防除所	もり 森	ぐち 口	かず 一	し 志
愛媛県農林水産研究所	くぼ 窪	た 田	せい 聖	いち 一

## はじめに

日本産のアワフキムシ科 Aphrophoridae の分類は、林 (1991) によると 40 種で、アワフキムシ亜科 *Aphrophorinae* の一つに分類されている。アワフキムシ亜科のうちマツアワフキ (*Aphrophora flavipes*) はマツ属の吸汁性害虫として、またシロオビアワフキ (*Aphrophora intermedia*) はカンキツヤナシ類、オウトウ等の害虫として知られており、ホソアワフキ (*Philaenus spumarius*) はイネ科牧草の導管液を吸う被害が確認されている (林, 1991; MEYER, 1993; KARBAN and STRAUSS, 1993; MALONE et al., 1999)。アワフキムシ類は、成虫、幼虫とも植物の汁を吸って生活し、幼虫は排泄液と空気を利用して泡の塊をつくり、体全体を覆うことで乾燥や外敵から身を守るという特性を持つ (林, 1991)。

2013 年に愛媛県南部の施設イチゴで、アワフキムシ科昆虫による白い泡の塊が葉柄基部や花柄、葉裏、葉の分岐部等に多数付着する被害を生じた。特徴的な症状からアワフキムシ科昆虫が疑われたため、飼育して羽化した成虫 (図-1) を九州大学の紙谷聡志准教授に同定依頼した結果、アワフキムシ亜科のイシダアワフキ (*Aphrophora ishidae* Matsumura) であることが判明した。イシダアワフキは北海道、本州、四国、九州に分布する (KOMATSU, 1997) が、本種は農作物の害虫として記録がなく (日本応用動物昆虫学会, 2006)、イチゴへの寄生の確認は初めてであったことから、2013 年 5 月 28 日に技術情報を発表した (愛媛県病害虫防除所, 2013)。

本稿では、愛媛県における施設栽培イチゴでの被害実態、施設周辺での寄生状況、幼虫や成虫の発生時期、さ

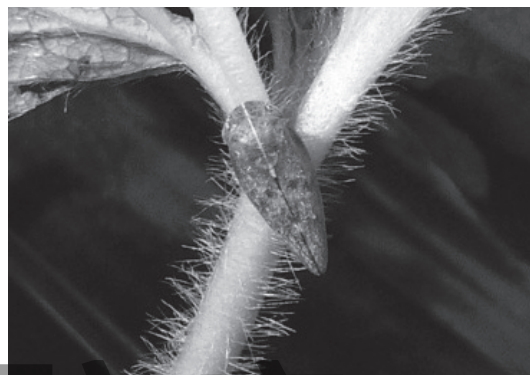


図-1 イシダアワフキ成虫

らに、幼虫の薬剤に対する感受性試験による防除対策等について紹介する。

## I 愛媛県におけるイシダアワフキの発生状況

イシダアワフキ幼虫の施設内イチゴへの寄生状況を調べるため、幼虫が作る泡が付着している株を寄生株 (図-2) とし、2013 年と 2014 年に寄生状況を調査した。愛媛県南部の施設イチゴに発生したイシダアワフキ幼虫の寄生株率は、2013 年が 18.3%、2014 年が 15.7%であった (表-1)。

KOMATSU (1997) によると、イシダアワフキ幼虫の寄主植物はヨモギ属 (キク科) であり、成虫の寄主植物はグミ属 (グミ科)、ヤナギ属 (ヤナギ科)、カツラ属 (カツラ科) が記録されている。今回、イチゴハウス周辺の 8 科植物への本種の幼虫による泡の付着の有無を調査したところ、新たにアメリカフウロ (フウロソウ科)、オオイヌノフグリ (ゴマノハグサ科)、小菊、タンポポ属の一種、スギナ (トクサ科) の 5 種で寄生が確認された。また、泡の塊はイチゴの花柄、葉裏、葉の分岐部等に付着しているが、特に新芽が発生する葉柄基部に多く見られ、イチゴハウス周辺雑草においても株元に近い位置で泡が確認されたことは、モンキアワフキ、シロオビアワ

Damage to Strawberry in the Greenhouse by *Aphrophora ishidae* (Hemiptera: Aphrophoridae) and its Susceptibility to Some Insecticides in Ehime Prefecture. By Kazu HAGIWARA, Kazushi MORIGUCHI and Seiichi KUBOTA

(キーワード: イシダアワフキ, いちご防除対策)